東日本大震災 発展期
（平成30年度～令和2年度）の
取組記録誌

第1部

第3章

地域別の復旧・復興の取組状況

The first section
Chapter 3

第1節 気仙沼・本吉エリア

気仙沼市・南三陸町

復興の推進力となる水産業や公共土木工事、観光拠点の整備が進む

気仙沼・本吉エリアは、リアス海岸により豊かな景観が形成され、波が静かな天然の良港で、古くから水産業を基幹産業として栄えてきました。湾内は日本有数の養殖漁場となっています。震災の津波によるこのエリアの浸水範囲は28㎢と広範囲にわたり、甚大な被害が発生しました。

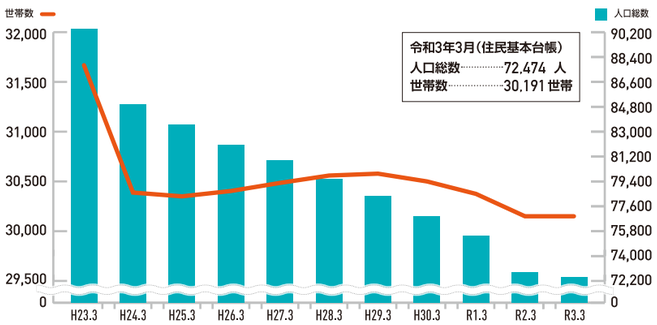
気仙沼市では盛土かさ上げによる安全な住居系市街地の整備と、商業・工業系市街地の整備を行い、土地区画整理事業では、令和元年9月に鹿折地区、令和2年9月に南気仙沼地区が竣工しました。南三陸町では、自然環境の保全と利活用を推進している町であることを国内外に発信し、交流人口拡大・地方創生への寄与を図るため、志津川湾ラムサール条約湿地登録へ向けて取り組み、平成30年10月に登録されました。

基幹産業である水産業において、気仙沼市では、高度衛生管理に対応した先進的な市場を整備し、平成31年4月に気仙沼市魚市場の供用を開始しました。

道路整備に関しては、三陸縦貫自動車道の整備が進められ、気仙沼港IC～唐桑半島IC間が令和3年3月に供用を開始したことで、県内区間が全線開通しました。離島振興事業では、気仙沼市の離島・大島と本土を結ぶ気仙沼大島大橋が平成31年4月に供用を開始しました。

観光については、気仙沼市内湾地区が令和２年７月に「ないわん」として、商業施設等がグランドオープンし、気仙沼大島については、商業施設「野杜海(のどか)」と「気仙沼大島ウェルカムターミナル」がオープンし、観光の拠点が整備されました。南三陸町では、「南三陸町震災復興祈念公園」が令和2年10月に開園するとともに中橋が開通し、公園と商店街をつなぐ、交流拠点となりました。

■気仙沼・本吉エリアの人口・世帯数の推移



出典:「日本人住民基本台帳人口及び世帯数(令和3年3月末現在)」

被災の状況

●人的被害（令和3年3月31日現在）

1,838人 死者	県全体の約17%	425人 行方不明者	県全体の約35%

●住宅被害（令和3年3月31日現在）

11,626戸 全壊	県全体の約14%	2,749戸 半壊	県全体の約2%

●避難状況（県全体ピーク時）

154か所 避難所	県全体の約12% (平成23年3月15日 午前11時)	24,984人 避難者	県全体の約8% (平成23年3月14日 午後6時)

●応急仮設住宅入居者（令和2年12月31日現在）

0人 プレハブ住宅	県全体の0%	0人 民間賃貸借上住宅	県全体の0%

※応急仮設住宅の供与は終了しました。

写真:倒壊した家屋(気仙沼市)

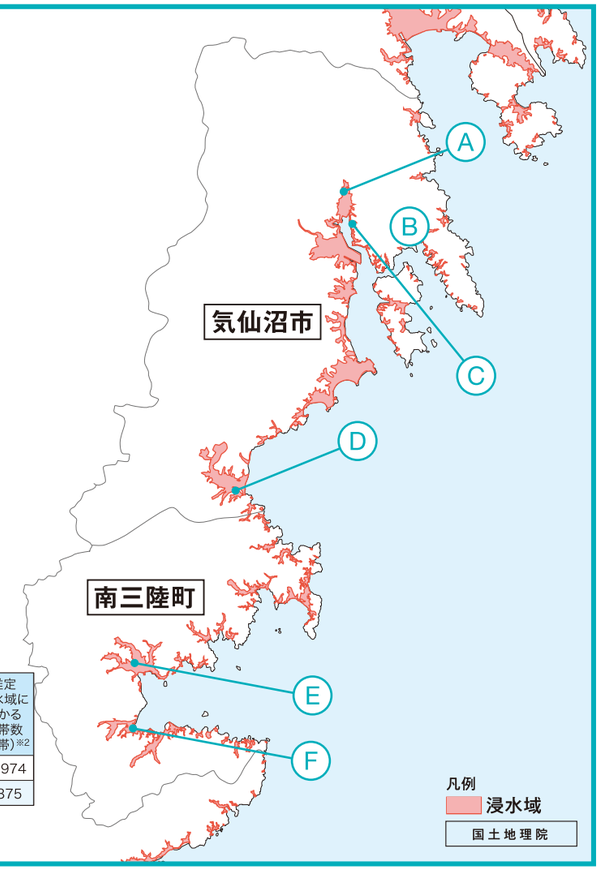
写真:津波が押し寄せる様子(南三陸町)

浸水域図

津波の痕跡高

地域名	最大浸水高	最大遡上高
気仙沼市(旧唐桑町)	15.2m	21.1m
気仙沼市	16.6m	17.3m
気仙沼市(旧本吉町)	19.3m	22.3m
南三陸町(旧歌津町)	18.1m	26.1m
南三陸町(旧志津川町)	19.6m	20.2m

出典:東日本大震災ー宮城県の発災後一年間の災害対応の記録とその検証ー(宮城県)



被災市町の基本データ及び被災関係データ

出典:総務省統計局刊行「統計でみる市区町村のすがた2015」

地域名	人口総数(人)※3	世帯数(世帯)※3	総面積(北方地域及び竹島を除く)(㎢)	可住地面積(㎢)	浸水範囲面積(㎢)※1	推定浸水域にかかる人口(人)※2	推定浸水域にかかる世帯数(世帯)※2
気仙沼市	73,489	25,457	333	93	18	40,331	13,974
南三陸町	17,429	5,295	164	37	10	14,389	4,375

※1 国土地理院:H23年4月18日公表　※2 総務省統計局:H23年4月25日公表
※3 総務省統計局:H22年10月1日(国勢調査結果)

被災の状況

Ⓐ 気仙沼市鹿折地区

鹿折地区は震災当夜に大火災が発生し、一帯が焼失しました。打ち上げられた大型漁船は平成25年に解体されました。

Ⓑ 気仙沼市唐桑地区

カキの養殖が盛んな唐桑半島には震災以前は海いっぱいに養殖いかだが並んでいましたが、津波により壊滅的な打撃を受けました。

Ⓒ 気仙沼港東岸

気仙沼港では津波襲来と同時に火災が発生、市街地にも燃え広がりました。鎮火まで約２週間を要し、焼失面積は約74haに上りました。

Ⓓ 気仙沼市本吉地区

震災の影響により、JR気仙沼線も全線不通となりました。陸前小泉駅付近の高さ約11mの高架橋には、民家の屋根が漂着していました。

Ⓔ 南三陸町志津川地区

南三陸町防災対策庁舎は赤い骨組みだけが残りました。津波は12mある庁舎をのみこみ、屋上に避難した多くの方々の尊い命が犠牲になりました。

Ⓕ 南三陸町戸倉地区

海岸から近い場所にあった戸倉小学校は津波により屋上まで全て水没し、全壊しました。

取組 01 環境・生活・衛生・廃棄物

各市町独自の持続可能な社会と環境保全を推進

発展期

平成23年4月から始まった応急仮設住宅（プレハブ住宅）は、気仙沼市・南三陸町の2市町で5,699戸が整備されましたが、令和3年3月までに全ての団地が解体完了となりました。

災害公営住宅は、平成29年に気仙沼市・南三陸町の両市町で、全ての整備が完成しています。気仙沼市では、再建の意向の変更等により入居辞退や申し込みの取り消しが生じたため、追加募集や一般公募を行ったほか、令和2年には、新たな移住者の受入れに災害公営住宅の活用を始め、空き家対策を図っています。南三陸町では、人口の減少を食い止めるための空き家対策が課題となっています。

気仙沼市では引き続き、盛土かさ上げによる安全な住居系市街地の整備と、商業・工業系市街地の整備を行いました。土地区画整理事業による土地のかさ上げや道路及び公園等の基盤整備工事が進められ、令和元年9月に鹿折地区、令和2年9月に南気仙沼地区が竣工しました。魚町・南町地区と松崎片浜地区においては、令和3年に完成予定です。

再生可能エネルギーの導入とスマートシティの形成において、気仙沼市では、「太陽光発電設備設置補助金」や「低炭素社会対応型浄化槽補助金」を交付する等、省エネ対策事業の導入を進め、災害に強い自立・分散型エネルギーシステムの構築を図っています。

エコタウンへの挑戦を掲げている南三陸町では、バイオマス産業都市構想や町内の事業者を中心としてFSCやASCの国際認証を取得し、環境に配慮した生産活動を行う等、自然との共生を意識した機運が高まっています。これらの取組を後押しするとともに、自然環境の保全と利活用を推進している町であることを国内外に発信し、交流人口拡大・地方創生へ寄与することが期待できることから、志津川湾ラムサール条約湿地登録へ向けて取り組んだ結果、平成30年10月18日に登録することができました。

写真：ラムサール条約湿地に登録された志津川湾（南三陸町）

取組 02 保健・医療・福祉

被災者の心のケアを継続し、地域環境づくりを推進

発展期

福祉施設に関して気仙沼市では、平成30年11月に「気仙沼市鹿折ふれあいセンター」が開館し、地域のコミュニティと生涯学習の拠点として整備されました。

子育てに関して気仙沼市では、少子化が進む一方で低年齢児の保育需要の増加により、待機児童の発生や幼児教育・保育無償化の対応等、就学前児童の幼児教育・保育施設の利用状況や社会環境の大きな変化に伴い、平成26年度に策定した「気仙沼市児童福祉施設等再建整備計画」を改訂し、令和元年度から令和5年までの5年間を計画見直しの対象期間とし、民間事業者の参入の促進や、民間事業者が担うことが困難な地域の保育は市が確保する等、子育て環境の充実を図っています。

重要な取組である被災者ケアにおいて、気仙沼市では、災害公営住宅や防災集団移転団地の住宅再建先を対象とした支援として、生活援助員（LSA）事業や災害公営住宅入居者等訪問健康相談事業、災害公営住宅入居者等の新たなコミュニティづくりの支援事業を行いました。また、被災者と地域コミュニティとの交流支援として、気仙沼市社会福祉協議会に業務委託し、被災者と地域コミュニティとのつながりの支援や高齢者の見守り等、「絆」再生事業を実施しました。南三陸町では、一般社団法人と南三陸町社会福祉協議会との協働で、地域住民に向けた心の癒しと心の彩創造事業を実施し、彩情報誌の発刊やコロナ禍の現状を踏まえた自宅で参加できるワークショップの開催等を実施しました。

取組 03 経済・商工・観光・雇用

被災した事業者の支援の継続と観光交流拠点整備を推進

発展期

気仙沼市では再生期後半から引き続き、気仙沼市産業復興支援事業として、被災した産業の早期復旧・復興のため、国や県の各種支援策を補完した独自の支援策、中小企業振興資金制度や地域商業施設等復旧整備事業補助金、地域商業等計画策定事業補助金等で、多くの事業者を支えました。

観光については、気仙沼市南三陸町圏域での震災前観光客入込数は平成22年で3,624千人に対し、令和元年は3,711千人となりましたが、令和2年は、新型コロナウイルス感染症の影響で2,241千人でした。気仙沼市の内湾地区では、観光集客拠点として平成30年11月に商業施設「迎（ムカエル）」、平成31年4月には市民一人一人が主体的にまちを創造していく起点となるスポットとして整備された公共施設、気仙沼まち・ひと・しごと交流プラザ「創（ウマレル）」、令和2年7月に商業施設「拓（ヒラケル）」と「結（ユワエル）」がグランドオープンし、4施設を「ないわん」として、まちの顔となる新エリアがオープンしました。大島については、カフェや鮮魚店等が集まる施設「野杜海（のどか）」が令和元年7月に、令和2年3月に観光交流拠点施設「気仙沼大島ウェルカムターミナル」がオープン、同年6月に新型コロナウイルスの感染拡大を受けて見合わせていた産直販売がオープンしました。南三陸町では、令和3年1月に、南三陸町道の駅の安全祈願祭が行われ、震災の伝承施設と公共交通ターミナルを整備しています。平成29年に本設された南三陸さんさん商店街も道の駅の一角に含まれ、震災伝承と観光交流、交通拠点の機能が期待されています。

雇用については、気仙沼市南三陸圏域の有効求人倍率は令和2年度で1.40倍でした。気仙沼市では、雇用機会が不足している地域や過疎化が進んでいる地域等による、地域の特性を生かした魅力ある雇用やそれを担う人材の維持・確保を図るための創意工夫ある取組を支援するため、令和元年に「気仙沼市地域雇用創造協議会」を設立し、国の「実践型地域雇用創造事業」を実施し、雇用創出を図りました。

取組 04 農業・林業・水産業

新設備整備や品質衛生管理の向上でさらなる水産業振興を図る

発展期

基幹産業である水産業について、気仙沼市魚市場は、被災したC棟とD棟の復旧に加え、水産情報等の発信施設とクッキングスタジオを整備し、高度衛生管理に対応した先進的な市場として平成31年4月に供用を開始しました。朝日町地区では、被災した市内の造船5社と舶用関連事業者2社が新造船施設建設事業主体として合併統合し、令和元年9月に造船所と燃油施設が完成しました。また、津波被害と地盤沈下の被害が大きかった南気仙沼地区と鹿折地区の一部を漁港区域として拡大し、盛り土、かさ上げを行い、水産加工施設等の集積地として整備しました。その結果、水産加工品の生産高は震災前の9割程度に回復しました。製氷能力、貯水能力、凍結能力については震災前と同等以上の水準となり、冷蔵能力も震災前と比較し8割程度となりました。

南三陸町では、平成28年に完成した南三陸町地方卸売市場が「優良衛生品質管理市場・漁港」認定を平成30年1月に取得し、宮城県内では初、国内では15番目の取得となりました。また、前年度から引き続き、志津川漁港本港地区を除く23漁港で漁業集落防災機能強化事業が行われました。

写真：南三陸町地方卸売市場（南三陸町）

取組 05 公共土木施設

三陸縦貫自動車道の全線開通等、物流の効率化や観光振興を促進

発展期

気仙沼市の土地区画整理事業は、東日本大震災クラスの津波でも浸水しない盛り土かさ上げゾーンとして整備が進められ、令和元年9月に鹿折地区、令和2年9月に南気仙沼地区が竣工しました。魚町・南町地区と松崎片浜地区においては、令和3年に完成予定です。

道路整備に関しては、高規格幹線道路整備事業として、この地域の物流を担う三陸縦貫自動車道の整備が進められ、気仙沼港IC～唐桑半島IC間の7.3km区間が令和3年3月6日に供用を開始したことで、県内区間が全線開通しました。沿岸部へのアクセス向上によって水産業や観光業の振興が図られ、地域の活性化に弾みがつくものと期待されます。

離島振興事業である大島架橋事業においては、気仙沼大島大橋を含む浪板橋から大島磯草間の5.5kmが平成31年４月に供用を開始しました。

海岸防潮堤に関しては、南三陸町の折立漁港海岸防潮堤左岸災害復旧等工事が令和2年度に終了しました。

防災公園の整備として気仙沼市では、南気仙沼地区と松崎尾崎地区の整備が進められ、松崎尾崎地区については令和3年4月に供用開始予定です。また、市のシンボルである安波山の麓の陣山に「気仙沼市復興祈念公園」が整備され、令和3年3月に開園しました。

南三陸町では、助作地区に緑の拠点として松原公園が移転整備され、陸上競技場を備えた公園として令和元年に完成しました。

取組 06 教育

震災遺構や祈念公園の整備により防災・減災教育の充実を図る

発展期

気仙沼・本吉地区にある公立小中学校のうち津波の被害を受けた学校は7校でしたが、復旧は平成27年までに全て完了しました。気仙沼市では、児童減少等により平成25年6月に気仙沼市義務教育環境整備計画を策定し、整備計画を元に直近では水梨小学校が平成31年3月で閉校し、松岩小学校へ統合しました。また、津波で被災し、気仙沼高等学校第2グラウンドに建設された仮設校舎を使用していた気仙沼向洋高等学校は新校舎が完成し、平成30年8月に移転しました。

震災遺構として保全整備を進めてきた気仙沼向洋高等学校旧校舎は、「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」として平成31年3月に開館しました。南三陸町では、追悼、継承、感謝、未来を想像する協働の場として「南三陸町震災復興祈念公園」が令和元年12月の一部開園を経て、令和2年10月に開園しました。同時に中橋が開通し、祈念公園と南三陸さんさん商店街をつなぎ、交流をつなぐ拠点となっています。

生涯学習施設としては、気仙沼市では、気仙沼図書館、気仙沼中央公民館等、４施設が被災しましたが、気仙沼図書館が平成30年３月31日、気仙沼中央公民館が令和３年12月１日に開館し、復旧を完了しました。南三陸町では、地域住民の学びと集いの拠点であった南三陸町図書館と志津川公民館をはじめとする町内公民館・図書館の4施設が被災したため、志津川地区に図書館機能と公民館機能を併せもつ複合施設・生涯学習センターが平成31年4月25日に開館しました。

防災教育について、気仙沼市では市民みんなで防災を考えるものとして毎年度、気仙沼市防災フォーラムを開催しています。
南三陸町では、志津川湾が平成30年10月に国際的に重要な湿地を守るラムサール条約に登録されました。藻場の多様性や、希少な水鳥の重要な越冬場所であることが評価され、海藻の藻場としては国内初、震災後の被災地としても初の登録となりました。また、被災した「南三陸町自然環境活用センター」が、令和2年2月に戸倉公民館2階に開所し、復旧を記念してシンポジウムが開催されました。シンポジウムでは、令和元年2月に開催された「KODOMOラムサール」をきっかけに、町の自然環境や歴史を子どもたちが学び、発信する機会を作るために結成された「南三陸少年少女自然調査隊」が1年の成果等を発表しました。今後、自然調査や研究、体験活動の拠点になることが期待されています。

気仙沼市の国登録文化財修復事業については、内湾地区国登録文化財群復興プロジェクトをと連携し、国内外の民間財団の支援を受け、被災建造物の応急修理及び現地での養生、さらに再生しつつある文化財群を活用したまちづくりを実施し、平成31年2月に「気仙沼港と風待ちの風景～歴史的建造物の復興プロジェクト～」として日本ユネスコ協会連盟の「プロジェクト未来遺産2018」に登録されました。平成28年9月に角星店舗、平成30年4月に武山米店店舗、令和2年7月には、男山本店店舗が再建されました。

取組 07 防災・安全・安心

災害時の拠点としての消防・警察施設の全ての復旧が完了

発展期

消防機能回復事業に関して、南三陸町では、仮設舎で業務を続けていた南三陸消防署の新庁舎が令和元年8月に開所しました。新庁舎は、旧庁舎より約15m高い標高約20mに設けられています。これにより、気仙沼・本吉地域の消防本部管内では４カ所の消防署・出張所が被災しましたが、全て再建されました。

警察施設に関して、気仙沼市では仮庁舎で業務を続けていた鹿折駐在所が移転・新築され、平成31年4月に開所しました。また、地域の見守り等の活動を行うボランティアの活動拠点である民間交番「気仙沼ぼうはんセンター」が、平成30年5月に旧南町交番仮設庁舎を整備し、設置されました。南三陸町では、仮設庁舎で業務を行っていた南三陸警察署の新庁舎が完成し、令和3年3月に業務を開始しました。災害対策で、72時間稼働可能な日常用発電機や屋外にマンホールトイレを設けています。

震災を教訓とした防災・減災については、前年度から引き続き、両市町ともに総合避難訓練を毎年実施し、令和２年度に関しては、新型コロナウイルス感染症の感染予防対策をふまえた避難所開設・運営訓練を地域住民一体となって行い、避難体制の強化をや防災意識の向上等を図りました。

復旧・復興状況（定点観測）

▶ 気仙沼市魚市場前地区

▶ 南三陸町歌津地区